

KKC

# 「建設業で本当にあった心温まる物語」を発売

建設会社の経営者で組織やり取り、家族とのつながりするNPO法人建設経営者倶楽部KKC(降旗達生理事長)はこのほど、建設工事現場の実話を基にした「心温まる物語」が詰まっ

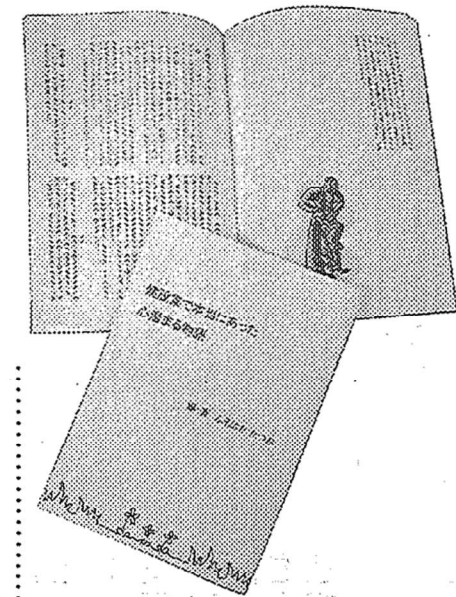
ちの姿を一人でも多くの方に知っていただき、建設業界の活性化、ひいては日本全体の成長につなげたい」と思いを話す。

中高大学生が建設業界に対する関心を高め、一人でも多くの若者が建設業界の扉を開くよう学生対象に小冊子1万部を無料配布予定。また、建設会社で人材採用時・社員教育時に活用する企業には有料(500円)で配布す

「建設業で本当にあった心温まる物語」を発売した。同書は、約500人の建設従事者が減少の一途をたどる現状に危機感を感じ、中高大学生への建設業界に対する関心を高めることで、震災復興支援、国土強靱化計画に伴う建設技術者、建設技能者の人材不足・高齢化問題の解決を図る必要があると考えた」と説明。

降旗理事長は、ハタコンサルタント  
電話052  
(5333)9

「この本を通じて、建設業の真の様子や心優しき男た688まで。」



## 「心温まる物語」の事例

私の父は左官屋でした。子供のころは、父が職人であることを恥ずかしく思った時期もありました。ただ、なんとなくそう思っていました。近所に出かけても、市外に出かけても父は必ず「このうちの壁はお父さんが塗ったんだ」とか「この玄関のタイルはお父さんが貼ったんだぞ」と得意気に言っていました。そんな左官屋の父も、もういません。しかし実家に帰ると父が自分でデザインし貼ったタイル張りのお風呂が待っています。父の自信作のお風呂場はない父を感じられる場所でもあります。そんな場所があるということは、職人の家族の特権だと自負しています。

た。その頃は「ふーん」とあまり気に留めていませんでした。しかし自分が働くようになりそれは自分のしてきた仕事が形になって残るということです。そんな職種はほかにはあまりありません。何年、何十年たっても変わらず自分が手がけたものがそこにあるのです。うらやましい限りです。



降旗理事長